

アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1997. 3. 31

No. 35

手前がポロチセの焼け跡、奥が半焼した2号チセ



特集：ポロチセ・2号チセの火災 と復興

昨年の12月20日、当館付属の復元家屋ポロチセより出火、炎は瞬く間にポロチセを焼きつくし、2号チセや食糧庫、熊檻など隣接する施設にも飛び火した。

厳寒の中、翌日からは関係機関の方々の協力を得て、懸命の復旧作業がつづいた。



2号チセの修復

罹災状況

2号チセは、昭和57年に建設された復元家屋であり、以来、当館の主要な野外施設のひとつとして、古式舞踊の演舞・解説、近年は体験学習の会場としても利用されてきた。

修学旅行など多人数の収容を念頭に置いた建物であるため、東西18m、南北9m、高さ8mとチセとしては非常に大型であり、他館の復元家屋とは趣を異にするが、こうした大型チセが伝統的なものでないかといえそうではない。かつて、オンネチセと呼ばれる村長むらおさの家の中には、儀式や集会・裁判などの必要から200～300人も的人员を収容できるものもあったとのこと。2号チセにおいては十分な強度を保つために釘やボルトなどの金属部品も用いているものの、屋根の構造、用材などはアイヌの伝統的な家屋の造りに則っている。

2号チセは今回の出火元であるポロチセの北側16メートルにあり、鎮火後も原形を止め、一見被害は僅少に見えたが、いかにせん茅と木からなるチセの構造上、ポロチセ側（南側）の屋根茅および構造材の内部は炭化し、壁茅も南東角を中心に被害を被った。また、火災時にチセ内の宝物の搬出、あるいは消火活動の際に壁を破ったため、そうした箇所箇所の補修も必要となった。

ポロチセ、1号チセ、2号チセという当館の主

要な野外3施設のうち、罹災しなかった1号チセで当面の営業を継続しつつ、来館者が集中するさっぽろ雪祭り前までに2号チセを改修、本格的な観光シーズンの幕開けとなるゴールデンウィークまでにポロチセを完成させることに目標を定めた。

職員にとっては思い出深いチセの焼失とはいえ、悲嘆に暮れる間もなく、作業は罹災の翌日から始まった。以後、翌年1月末に完成するまでの一か月余りの間、町内外のボランティアの応援を仰ぎつつ、作業は全職員総出で、正月休みや休日も一部返上して進められた。

解体作業

無傷で済んだ部分はそのまま残す方針を採ったため、重機などを用いることができず、ほとんどが手作業となった。

まずは足場を組み、屋根の茅を下ろす。延焼をくい止めるために20トンもの放水を受けた茅は重く固く凍り付き、男性職員が足元の危うい屋根上でツルハシを振るっては古い茅を地上に落とし、それを女性職員がブルーシートに乗せて湖畔まで運び燃やすという、過酷この上ない作業となった（表紙写真参照）。

2号チセのセム（物置兼玄関）は罹災を免れ、当初はそのまま残す方針だったが、母屋の屋根葺きを終えた時点で、美観を考慮してセムの屋

作業の流れ

母屋解体	(12/21～23)
材の皮むき	(12/22～)
葦束ね	(12/23～)
アオダモ採取	(12/24)
小屋組	(12/27～29)
屋根葺き	(1/5～10)
棟茅	(1/10～11)
仕上げ	(1/11～12)
セム屋根解体	(1/13)
セム屋根葺き	(1/13～19)
すだれ編み	(1/17～19)
外壁補修	(1/19～21)
内装	(1/10～26)

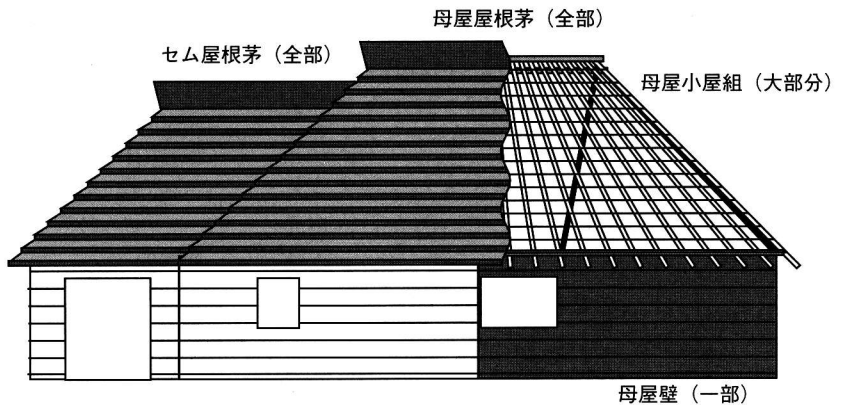


図1 改築箇所

根も葺き替えた。

小屋組

本来、チセの屋根は、Y字型をした柱の上に乗せてあるだけである。また、小屋組は柱の上で組み立てるのではなく、別に作って大勢で持ち上げて柱の上に乗せる。しかし当館のチセでは、柱と屋根の接合部分は和風建築のそれであり、屋根は柱の上で組み上げる方法をとっている。

このように規模の違いからくる工法の違いはあるものの、アイヌ家屋最大の特徴である三脚構造、すなわちケトゥンニは伝統に則っており、小屋組の他の部材も、規模の大きさに比例して

本数が多くなっているものの、構造はまったく同じである。図2は典型的なチセの小屋組、図3、写真1は2号チセの小屋組である。

この小屋組も火災によって被害を受けたため、大部分造り直した。長期の使用には耐えないが、作業に耐えうるだけの強度は保っていたため、垂木（チセソカリカニ）と棟木（キタイオマニ）を取り除いた後、古い材を一本外しては新しい材と取り替えるという方法をとった。

また、材の接合部分は、本来はブドウヅルのみで固定するのだが、大型チセでは強度を補う意味で釘、ボルト、番線によって固定し、ブドウヅルはそれを隠す意味あいでも用いた。

ケトゥンニを始めとする小屋組を組んだとこ

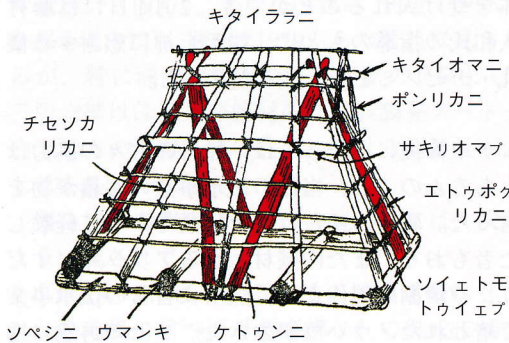


図2 チセ小屋組（鷹部屋福平『アイヌの住居』より）
左右に2組の三脚構造が見られる（赤）。セムが付属する場合には、図3のように3組の三脚構造をもつ形になる。
なお、アイヌ語の部位名称は筆者がカナ表記に改めた。



写真1 東面のケトゥンニ（三脚）の取り替え：白く見える斜めの木4本のうち、一番右はシッケウリカニ。その他の3本がケトゥンニ。西面にも同じ三脚構造が設けられ、東西のケトゥンニの頂点に棟木（キタイオマニ）が渡される。

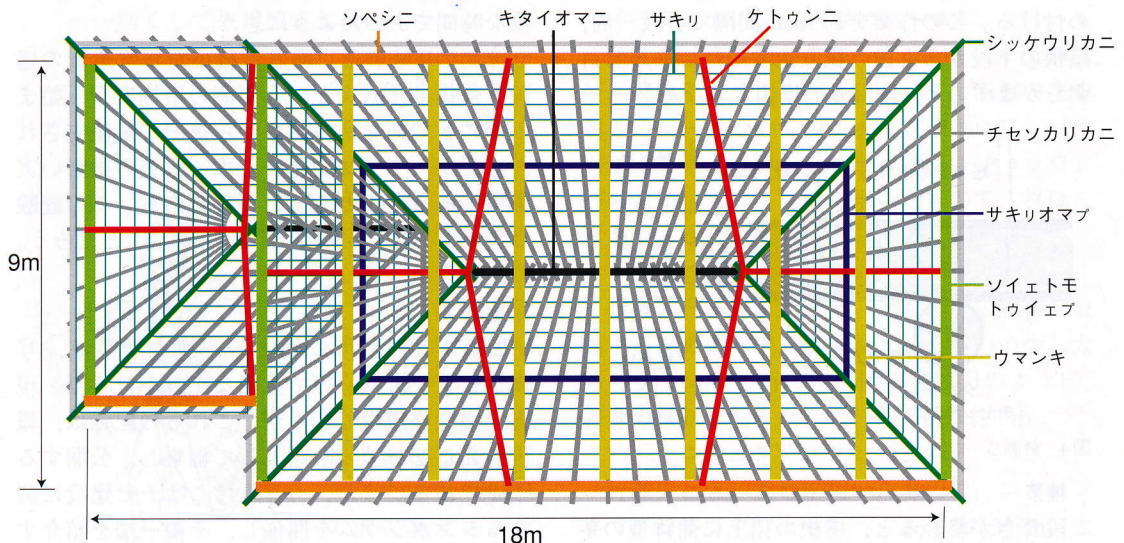


図3 2号チセ小屋組
大型チセのためにタルキ（チセソカリカニ）等の本数が増えているが、構造自体は図2とまったく同じである。

ろで、サキリと呼ばれる細いアオダモの横木を15段にわたって屋根の四囲に巡らし、藁縄でタルキ（チセソカリカニ）に固定し、更に漁網（本来はアプッキ）をかける。これらは屋根茅の下地になる。

屋根葺き

一口に「茅葺き屋根」とは言うが、実際に用いたのは葺（^{おし}ヨシ）である。茅（＝ススキ）はアプッキ（すだれ）に編んで、内壁、炉棚などに用いるが、屋根や外壁には使用していない。

段葺きもまたアイヌの屋根の特徴である。段の間隔はニサプ アニ パカリ（すね・で・測る）といって、膝丈が基本となる。したがって、2号チセでは40～45cm間隔で段葺きにし、計15段葺きの屋根となった。

茅はあらかじめ使用部位ごとに10～17cm径に束ねておき（キシナという）、これを段の下端を揃えるために乗せた足場丸太の上に並べ（表紙写真下）、上からサクマ（サキリと同じくアオダモの棒）で押さえ、茅を挟んだサクマとサキリを紐で縛ることによって茅を固定する。

この工程は「針刺し」と呼ばれ、屋上と屋内の共同作業となる。屋内から一人がサキリの上から針（ケム）を屋根面に垂直に刺し、屋根上の一人がこれに糸を通して返す。屋内ではサキリをまたぐようにして今度は下から針を返す。屋根上で糸を抜き取り、サクマに縛って茅を締め付ける。この作業を約30cm間隔で各段一周、屋根の下段から上段へ繰り返すわけである。針刺しがまずいと、雨漏りの原因ともなる。

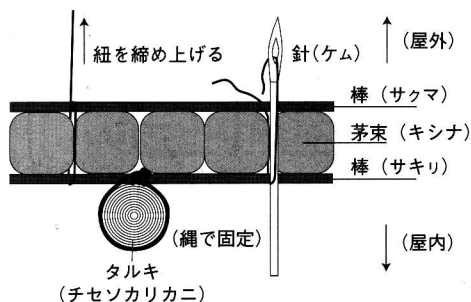


図4 針刺し

棟茅

段葺きが終わると、屋根の頂上に蒲鉾型の茅を葺く。これに先立ち、南北双方から葺いた茅は最上段ではX型に交差することになる。この

茅の穂先を丸く踏み固め、これを芯として今度は茅を水平に並べて厚みを出す。この茅は、棟の南北両側に渡した2本の丸太に紐で固定される。改修前の2号チセでは、雨漏りを防ぐために棟上に芝を乗せてあったが、今回は乗せなかった。

仕上げ～完成

棟茅が終わると、段を支えていた足場丸太を外し、茅束を解きほぐし、整形するという作業をしながら最下段まで下りてくる。これで屋根の葺き終わりである。以下、壁と内装の補修を行い、修復は完了した。

この間約一か月。1月30日には体験学習の団体を受け入れることができ、2月1日には藤村久和氏の指導のもとに、竣工を神に感謝する儀礼・チセノミを行うことができた。

チセ修復にあたっては、館外の方々の協力はもちろんのこと、当館の伝承事業の蓄積が物を言った。職員の中にはチセ建設をかつて経験した者もあり、また内壁材となるアプッキ（すだれ）や炉棚の製作など、随所に日常の伝承事業で培われたノウハウが生きた。チセの再建に携わった期間、当館は過去の文化遺産を展示するだけの「博物館」でもなく、ましてただの観光地でもなかった。試行錯誤の毎日ではあったが、その試行錯誤こそがアイヌ文化の現在を拓く貴重な時間であったように思う。

今回の2号チセ、あとに続いたポロチセの建設・修復は、火災という不測の不祥事から始まったことであり、当然ながら復旧が最優先された。だが、アイヌ文化の伝承・研究の得難い実験場であったこともまた事実である。この経験は将来の事業に生かされ、実を結ぶことだろう。

追記：

2号チセの修復に始まる一連の事業は、写真・ビデオ・録音等で克明な記録を行った。現在、鋭意整理中であるが、これらの記録は、報告書およびビデオ映画として編集し、公開する予定である。また、今年9月にはチセ建設に関するシンポジウムを開催し、その一端を紹介する予定である（次頁参照）。

（安田 益穂）